

(完全主義の神学)。

至聖所で、最後の贖いで完全にされた人は、完全主義者ではない!!! 完全主義は中世時代のカトリックの神秘主義であり、自分の体験、# 2に目を向けて、平安がない。これはセブンスデー・カトリックである。

最後に、及川吉四郎牧師の言葉を引用しよう：

「聖化の目的は、栄化への備えにほかならず、その備えの完結は、至聖所における罪の除去、言い換えれば完全到達ということですが、それもまた義認同様、神の一方的な恩寵による以外の何ものでもないわけです。それがわかったとき、私は長い間つづいていた救いに対する不安、懸念、心配は、完全に一掃されたの

でした。

重ねて申し上げますが、我々が入信時に与えられた義認、これは十字架上でキリストから天国への救いを保証された泥棒が、罪以外何のいさおし(功績)もない身でありながら、神の一方的な全くの恩寵による救いであつたように、最後の義化、『罪なき完全の達成』も、やはりわれらの努力や功績によるのではなく、全くの神の一方的恩寵によるものなのです」(人類救済の神の計画とその象徴的模型としての聖所 p150)。  
「こんな恩恵、こんな幸いがほかにあるでしょうか。…神のさばきにおいて、われらの罪が神によってきれいに消し去られるときの幸いと喜びは、どんなでしょう。まさにもう手を挙げ、万々歳を叫びたいくなるほどのものにちがひありません」(同 140)。



稲田 実  
米国在住

本稿は稲田実先生が福音社編集長時代の 1970 年に当時の「使命」誌にアドベンチスト神学シリーズを連載し、その中の「キリスト論」をご自分で執筆なさり、四月号に掲載なさったものです。その後「キリスト論」が活字になったことがありませんので現在の「ライブ」誌に再掲載を希望されましたが、適当なスペースがないとのことで、本誌にでも掲載してくださればと寄贈してくださったものです。

キリストの神性、人性をどう理解するかということは、特にキリスト再臨待望者にとっては重要な問題です。

「神性と人性が神秘的に結合し、人と神がひとつになった。わたしたちが墮落した人類の希望を発見するのは、この結合の中においてである。」サインズ・オブ・ザ・タイムズ 1890 年 7 月 30 日

キリストは半神半人ではないと言われる。キリストは神なのか人なのか、キリストはどういう意味で神であり、どういう意味で人なのかという疑問は、キリストの人格について 2000 年間も問われ続けてきた問題であり、今も多くのクリスチャンの中に潜在する疑問であろう。

聖書にはキリストの神性、人性の事実に関する叙述はあるが説明がない。しかも「人間の限られた能力では、この不思議な神秘、すなわち神性と人性の二つの性質の融合を定義することはできない。それは決して説明することはできないのである」(SDA コメンタリー 7 巻・904 ページ、E・G・ホワイト注)。

しかし救いの計画の中核であるキリストの受肉の問題は、不可解なままで放棄してよいということではない。前述の預言の霊のことばのすぐあとに「それでも

コロサイの信徒への手紙2: 9、10 (→神性は、ローマ1: 20と2聖句のみ)

キリストの内には、満ちあふれる神性が、余すところなく、見える形をとって宿っており、

あなたがたは、キリストにおいて満たされているのです。キリストはすべての支配や権威の頭です。

人間は、神の性質にあずかる者となる特権を与えられ、このようにして、彼はある程度、この神秘に入ることができるのである」(同上)と約束されている。そればかりか、セレクトッド・メッセージ1巻244ページにホワイト夫人は「我々は悔い改めた心と学ぶ者の謙遜さをもってこの研究に当たるべきである。そうすれば、キリストの受肉の研究は隠れた宝を深く掘る探究者に報いるところの実り豊かな領域である」と励ましておられる。ここにアドベンチストとしてみ霊に導かれて神学する必要が生じるわけである。神は少なくともわれわれの救いに必要な真理は惜しみなく示してくださるという確信を持ってこの問題を探求してみたい。

キリストの二性の問題は何分にも複雑神秘的なテーマであって、一つずつ解きほぐしていくのが最もよいと思われる。そこで、いくつかの質問に答えながら進めてみよう。

## キリストは神であられたか。

「言は神と共にあった」「言は神であった」(ヨハネ1:1)と言われているように、キリストは神であった。預言の霊も「キリストは本質的にそして最高の意味において、神であった。キリストは永遠から神と共におられ、すべてのものの神、永遠に祝福されたおかたであった」(セレクトッド・メッセージ1巻247ページ)と証言している。

それでは一、

## その神なるキリストはほんとうに人間になられたのか。

まさに「言は肉体となり、私たちのうちに宿った」(ヨハネ1:14)のであり、パウロが指摘しているように「人なるキリスト・イエス」(テモテ第一・2:5)になられたのである。前述のセレクトッド・メッセージ同ページに、「キリストは人性をとったふりをしたのではない。まさしく人性をとられたのである。彼は現実に人性を所有された。…彼はひとりの人間であると宣言され、まさに人なるキリスト・イエスである」と強調される。

しかし、本質的に神であられたかたが完全な人間となられたということは、人間の論理では、次の質問を呼び起こす。

## キリストが人間になられた時、彼はもはや神ではなくなったのではないか。

マタイによる福音書8:20

イエスは言われた。「狐には穴があり、空の鳥には巣がある。だが、人の子には枕する所もない。」

答は厳然たるノーであって、キリストご自身が「よくよくあなたがたに言うておく。アブラハムの生まれる前からわたしは、いるのである」(ヨハネ8:58)と人間以前からの先在を断言しておられる。「彼(キリスト)は地上におられた間も神であったが、彼は神のみかたちを脱ぎ捨てられ、その代わりに人間の姿かたちをとられた。……彼は神であられた、しかし、彼は神のみかたちの栄光はしばらくの間放棄されたのであった」(SDA コメンタリー5巻1126ページ)。

しかし、人間の疑問は続く。

## それでは、キリストは人間と全く同じ肉体をもたれたのだろうか。

「御子は、肉によればダビデの子孫から生まれ」(ローマ1:3)、われわれ人間が「血と肉と共にあずかっているので、イエスもまた同様に、それらをそなえておられ」た(ヘブル2:14)。「イエスは、人類が4000年にわたる罪によって弱くなっていた時に人性をおとりになったのである。アダムの子孫のすべての子らと同じように、イエスは遺伝という大法則の結果をお受けになった」(各時代の希望上巻35ページ)。したがってイエスのもっておられた肉体は、われわれのもっている肉体と全く同じであった。

## それでは、われわれと同じ肉体の弱さをもっておられたキリストは罪を犯されたか。

彼は「罪は犯されなかったが、すべてのことについて、わたしたちと同じように試練に会われたのである」(ヘブル4:15)。「キリストは墮落した状態の人性をおとりになっても、その罪には少しもあずかれなかった。われわれはキリストの人性の完全な無罪性について少しの懸念ももってはならない」(セレクトッド・メッセージ1巻256ページ)。

## それでは、キリストが罪を犯されなかったのは彼が神であったからだろうか。

いいえ、これこそ問題の鍵なのである。「キリストは、その肉の生活の時には、激しい叫びと涙をもって、ご自分を死から救う力のあるかたに、祈と願いとをささげ、そして、その深い信仰のゆえに聞きいれられたのである。彼は御子であられたにもかかわらず、さまざまな苦しみによって従順を学び、そして、全き者とされたので、彼に従順であるすべての人に対して、

永遠の救の源となり、神によって、メルキゼデクに等しい大祭司と、となえられたのである」(ヘブル5:7-10)。つまり、彼が人間と同じ肉の弱さにあずかりながら、なお罪を犯さなかったのは神として超人的能力を行使されたのではなく、神の特権に逃げこまれたからでもない。むしろわれわれ人間と同じように祈りと叫びと信仰によって、人間として全き者とされたのである。ホワイト夫人は「天の大君は人間の運命をひき受けられ、人間がもつことを許されているのと同じ能力をもって、人間が耐えなければならぬと同じようにサタンの誘惑にたえられた」(セレクトッド・メッセージ 1 巻 252 ページ)。

したがって「人としてキリストは、人性と神性とを結合する天来の電流によって、ご自分の人性が充電されるまで、神のみ座に嘆願された。世の人々にいのちを与えるために、イエスは絶え間ない交わりを通して神からいのちを受けられた。イエスの経験がわれわれの経験となるのである」(各時代の希望中巻 101 ページ)。

**第38章 さあ、しばらく休みなさい**  
最後の一文は「イエスの経験が我々の経験となるべきである」とも訳すことができる。さらにホワイト夫人は英文サイنز 1897 年 6 月 17 日号に「キリストは、その人性にあって神の神聖な力を捉えられた。そしてこのことは人類家族のすべての人ができる特権である。キリストは人間が神性をもっていなければならないようなことは何もなさらなかった」と言っておられる。この一文はキリストの人格についてかなり含蓄の多い啓示である。その趣旨は明らかに、キリストはわれわれ人間にとって高嶺の花である神的超能力は一つもお用いにならなかったということである。もちろん、こう結論すると、それでは、キリストの数々の奇跡やふしぎなわざはどう理解したらよいかという反論が出てくるであろう。しかし、これに対しても聖書は十分に答えている。キリストの奇跡の最大のものは死人をよみがえらせたことであつた。しかし、これは聖書の記録によるとキリストのみの専売特許ではなかった。ザレパテの女の男の子をよみがえらせたエリヤやシュネムの女の子をよみがえらせたエリシャを思い起こすだけで十分である。これはキリストに限らず、求めと必要によっては神のしもべ、人の子にも行使することの許された天来の力であつた。それでは、ご自分が3日後によみがえることを預言なさったことはどうかという質問もあろう。しかし、これも数々の預言の幻を与えられた預言者、人の子がいたことを思い合わせると、やはり人の子一般にも許された天来の力といえる。それどころか、「イエスはますます知恵が加わり、背たけも伸び、そして神と人から愛された」(ルカ 2:52)といわれているということは、完全に人間としての成長と学習過程に従われたことであつた。マリヤをその最初の教師とし、まったく人の子として、かつて「ご自分の手で地と海と空とにお書きになった教え(教課)を学ばれたのである」(各時代の希望上巻 61 ページ)。

高嶺の花：手が届かないほど素晴らしいもの

キリストは自分が約束のメシヤであるということさえ、聖書の研究と 12 才の時初めて宮もうでをされ、白い衣をまとった祭司が行なっている、厳粛な儀式や祭壇の上のいけにえの動物をごらんになって「一日ごとに、イエスはそれらの意味をだんだんはつきりさせられた。どの行為もご自身の生涯に結びつけられているように思われた。……ご自分の使命の奥義がだんだん救い主に開かれた」(各時代の希望上巻 73 ページ)のであつた。つまり、キリストはわれわれと全く同じ条件と手段によってのみ、ご自分の使命を見いだされ、また完全に遂行なさつたのである。けっして、天との直通電話があつて彼の果すべき役割について特別の通知を受け、それによって定められたメシヤの過程を台本通りに演じたのではない。もし受肉以前の先験的記憶ないしは特別の連絡によって自分がメシヤであることを自覚していたならば、サタンが荒野でイエスを試みた時に「もしあなたが神の子であるなら」という仮定法で3回も接近したことは全然意味がなくなってしまう。「もしあなたが神の子であるなら」という仮定法で迫つたことは、イエスがやはり我々と同じ人間として祈りと信仰と研究によってご自分がメシヤであることを信じるに至つたので、この人間的信仰を動揺させる余地があつたからである。これはなんたる驚くべき事実であろうか。世界を救うメシヤともあろうかたが、これほど危険な橋を渡られたとは。「すべての人と同じように人生の危険に会い、すべての人間と同じに失敗と永遠の損失をかけて戦いをたたかわれることをお許しになった」(各時代の希望上巻 35 ページ)。もう、ここまで例証すれば、キリストがいかに人間になられ、いかに人間と運命を共にされ、いかに人間としてその生涯を完成なさつたかが判明したことと思う。したがって裏返しをすればこのことは、イエスがおできになったことはわれわれでもできる可能性があるということを示している。いや、それどころかイエスは「わたしを信じる者は、またわたしのしているわざをするであろう。そればかりか、もっと大きいわざをするであろう」(ヨハネ 14:12)と保証しておられる。

**神の子69/69,人の子103/114**

考えてみるとイエスはその生涯中、ご自分のことを「神の子」と呼ばれるよりも「人の子」と呼ばれることの方が圧倒的に多かった。これはいったい何を物語っているのだろうか。これはとりもなおさず、キリストは「私はあなた方と同じ人間なんだ、人間になりきつたのだ」ということの強調に違いない。「この大祭司は、わたしたちの弱さを思いやることのできないようなかたではない。罪は犯されなかったが、すべてのことについて、わたしたちと同じように試練に会われたのである。だから、わたしたちは、あわれみを受け、また、恵みにあずかって時機を得た助けを受けるために、はばかりことなく恵みの御座に近づこうではないか」(ヘブル 4:15、16)。

キリストが徹底的に人間になりきられたという受肉

があってこそ、われわれも完全な生涯を歩くことができるという希望と具体策が開かれたのである。これこそ、福音の中核であり、福音そのものである。

## しかし、それでは、キリストはいかなる意味で神であったのか。

キリストを人間として強調してきたが、それでは神としてのキリストはいったいどうなるのかという大きな疑問が残るに違いない。キリストは生涯中、大部分ご自分を「人の子」として強調なさったが、また「神の子」であることもお認めになり、また認められることを望まれた時点がいくつかあった。弟子たちに「……あなたがたはわたしをだれと言うのか」と問われて、ペテロが「あなたこそ、生ける神の子キリストです」と答えたことはイエスを大いに喜ばせ、信仰告白の一大テーマでもある。そのほかにはあまり数多くないが、キリストご自身が「神の子」であることを認めたのはピラトの前であって、あの時はご自分を「神の子」として認めるのが一番不利な時であった。つまり、彼は「神の子」として責任をとらなければならない時に、ご自分を「神の子」として告白しておられる。結局、苦労は人間並み、責任は神としてという姿が浮き彫りになってくる。

確かに、キリストが神と等しいものとしての責任をもっておられなかったならば、十字架で払われた犠牲は、われわれの罪をあがなう効力をもたないことになる。

## そこで、改めてキリストの「神性」とは何かということをもう一度考え直してみる必要が生じた。

キリストは責任者としては神と等しいものでなければならなかった。しかし、「キリストは、神のかたちであられたが、神と等しくあることを固守すべき事とは思わ」なかったと言われている（ピリピ 2:6）。これは、どう解釈したらいいだろうか。キリストが責任者として地上生涯中も神でなければならなかったとすれば、彼は天におられた時から地上におられた時、さらに天によりみがえられた間を通じて連続した一つの生命的存在でなければならぬことになる。そうであるに違いない。しかし、前述のようにキリストは神の能力と特権は「しばらくの間放棄されたのであり、また天におられたときの記憶とも断絶をいったん経験なさったと考えられる。これらの事情ははじめにことわったように聖書に説明されているわけではない。しかし、その型は少なくとも第二の聖書に見ることができる。例えば蝶の一生を考えてもらいたい。彼らははじめは木の葉の上をはいまわる毛虫である。しかし、ある時期がくると蛹（さなぎ）になってからの中にとじこもり

微動だにしなくなる。しかし、一定の蛹の期間を経ると、彼らはその殻から開放されて大空に舞い上がっていく。彼ら蝶が自分たちの前身や前生涯を覚えているかどうかはわからない。しかし、彼らは毛虫の時代から蝶の時代まで、あれほど姿かたちや生態が変わっても、一貫した一つの生命体であることにはまちがいない。だから、キリストは父なる神に向って「あなたは…わたしのために、からだを備えて下さった。…その時、わたしは言った、『神よ、わたしにつき、巻物の書物に書いてあるとおり、見よ、御旨を行うためにまいりました』（ヘブル 10:5-7）と言われて、不自由な蛹のような人の子の姿をおとりになったのである。

## 「神性」と「神聖な性質」

あかしの書の中に「彼の人性を通して神性がひらめいた」という表現がしばしばでてくる。これは、よくキリストが神の能力を瞬時現わされたようにとられがちである。しかしこのことについて、わがバシフック・ユニオン大学の神学部長ウィリアム・ハイド博士はこういうふうに言われている。「神性」とは、二つのケースを除いては、ほとんど全部が、その文脈上、目撃者や罪深い人々の目に映じたイエスの神々しさであると言っておられる。したがって、これも、イエスが瞬間、神の立場にかえられたのではなくて、天来の電流によって充電された、「神聖な性質」によるものであって、けっしてすべての特権をもった神格の一位の方としての「神性」の誇示ではなかったのである。

## 誤ったキリストの神聖観

キリストを「神の子」として信受することは正しい。それが我々の信仰の土台である。しかし、われわれ人間とは違った超能力的な神格者として祭り上げることは一見信心深そうに見えながら、実はせつかく大きな危険と犠牲を払って人間に近づいてくださった救い主キリストの救いのわざを割り引いてしまうことになる。実生活の上でも、イエス様はどうせ、われわれとは違った存在のかたなのだから、完全にイエスに似ることはできなくても無理はないという言いわけと墮落に通じる。だから、このような意味で「イエス・キリストが肉体をとってこられたことを告白する霊は、すべて神から出ているものであり、イエスを告白しない霊は、すべて神から出ているものではない」（1ヨハネ 4:2,3）と言わなければならない。